

産業構造審議会 グリーンイノベーションプロジェクト部会
グリーン電力の普及促進等分野ワーキンググループ（第6回）

議事録

- 日時：令和5年8月31日（木）11時00分～12時00分
- 場所：オンライン（Webex）
- 出席者：（委員）高村座長、植田委員、志村委員、鈴木委員、関根委員
竹内委員、藤田委員、松井委員、松本委員
（オブザーバー）NEDO 弓取理事

■ 議題：

1. 個別プロジェクトに関する研究開発・社会実装計画（案）について
「次世代太陽電池の開発」

■ 議事録：

○高村座長 それでは、少々定刻を過ぎておりますけれども、ただいまから産業構造審議会グリーンイノベーションプロジェクト部会グリーン電力の普及促進等分野ワーキンググループの第6回会合を開会いたします。

本日は、オンラインでの開催となります。

委員の皆様のお出欠ですけれども、本日は9名全員に御出席いただいております。今回から、株式会社三菱UFJ銀行サステナブルビジネス部企画開発グループの志村幸美上席調査役にも御参画いただきます。志村委員、もしよろしければ、一言御挨拶をお願いできますでしょうか。

○志村委員 高村先生、ありがとうございます。ただいま御紹介に上がりました、三菱UFJ銀行の志村と申します。日本のGX促進においても、グリーンイノベーション基金はとても重要な位置づけにあると認識しております。本ワーキンググループでは、主に社会実装に向けて、金融という立場から発言させていただければと考えておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

○高村座長 志村委員、どうもありがとうございます。これからよろしくお願いたします。

それでは、本日の議事に入る前に、会議の注意点について、事務局から御説明をお願い

できますでしょうか。

○笠井室長 事務局でございます。

本日の会議につきましては、プレス関係者を含めまして、会議終了までYouTubeによる同時公開としてございます。また、会議資料や議事の概要につきましては、経済産業省ホームページに掲載させていただくようにいたします。

以上でございます。

○高村座長 ありがとうございます。

それでは、早速ですけれども、本日の議事に入ってまいります。

議事に先立ちまして、本日の議論の進め方について、事務局から御説明をお願いいたします。

○笠井室長 資料2を御覧いただければと思います。本日の議論の進め方ということでございまして、今日の議論につきましては、次世代型太陽電池の開発プロジェクトにおきまして、ペロブスカイト型太陽電池の実証規模の拡大についてです。取組を拡大、追加する研究開発項目の背景、それから概要について資源エネルギー庁より御説明の上、委員の皆様より御質問いただき、議論させていただきたいと考えてございます。

御議論いただきたい事項としましては、別紙につけてございます。これはいつもプロジェクトの組成という観点から御議論いただく際の論点としてお示ししているものでございます。あくまでこれは御参考ということでありますので、これに限らず、委員の皆様の御知見、それから御専門の観点から御議論いただければと考えてございます。いずれにしても御参考ということで御参照いただければと考えてございます。

また、本日、追加、拡充ということで、既存の取組に追加していくという議論でございます。通常、新しいプロジェクトを立てる際には、1回目に概要とか背景を議論させていただいて、2回目にもう少し詳細な議論をしてということで、ツーステップでやっているのですけれども、今回については、追加、拡充ということでありますので、本日、議論を御了解いただければ、速やかに本日議論いただいた内容を進めていく。実際の契約の変更であるとか公募であるとか、そういうプロセスに進めていくということを前提に御議論いただければと考えてございます。

事務局からは以上です。

○高村座長 ありがとうございます。それでは、早速ですけれども、「次世代型太陽電池の開発」プロジェクトにおける取組内容の拡充について、本日新たに御議論いただきま

す。研究開発、社会実装の方向性及び研究開発・社会実装計画（案）について、プロジェクト担当課、資源エネルギー庁新エネルギー課から資料3、資料4に基づいて説明をお願いしたいと思います。説明の後、ぜひ委員の皆様にお1人ずつ御意見を伺いたいと思っております。それでは、能村課長、お願いできますでしょうか。

○能村新エネルギー課長 資源エネルギー庁新エネルギー課長、能村でございます。よろしくお願いたします。

資料を投影させていただいております。まず資料3に基づきまして、今回の背景及び加速化に向けた取組につきまして御説明させていただきたいと思っております。

資料をおめくりいただいて2ページ目でございます。まず、次世代型太陽電池、いわゆるペロブスカイトと言われるものがございますけれども、その前提といたしまして、日本におきましては、太陽光の設置は適地が非常に限られている状況でございます。左側下の表がございますけれども、主要国におきまして平地面積当たりの太陽光発電設備の容量は、実にドイツの2倍程度ということもございまして、日本については、入りやすいところには既に太陽光が入ってきているところでございます。こうした適地が非常に限られている中で太陽光の目標、カーボンニュートラルの実現、また、2030年エネルギーミックス実現のために、さらにそのポテンシャルをしっかりと見いだして設置していくことが重要でございます。

そういう観点で3つ目の黒丸に書いてございますけれども、既存の技術では設置できなかった場所に、ペロブスカイトは耐荷重の小さい工場の屋根ですとかビルの壁面といったところへの導入も進めることが可能であるというものでございます。こうした軽量で柔軟といった特徴を兼ね備えた面での性能を生かしていくことを技術開発でやっているところでございます。

次のスライド3ページ目を御覧いただければと思います。様々な太陽電池があるわけがございますけれども、その中でシリコン系、今一番普及しているのが左下でございます。他方で、シリコン系は非常に重いガラスで挟み込むこともございまして、重量も多く設置場所は野立て、また、新築の屋根が中心になっているところでございます。

今回御議論させていただいておりますペロブスカイトは一番右側に書いてございますけれども、ペロブスカイト太陽電池は、有機と無機のハイブリッドの素材で、日本発の技術であり、その発電効率自体も大幅に向上しており、シリコンの太陽光発電に対抗し得るものとして有望視されている状況でございます。

次のスライド4ページ目でございます。日本におけます取組状況については、グリーンイノベーション（G I）基金を通じまして、製造技術の確立に向けた技術開発を急ピッチで行っているところでございます。

このG I 基金の中で採択させていただいている積水化学工業は、資料の枠の中の左に入っておりますが、柔軟なフィルム型の太陽電池を開発されている。また、右側の東芝は、メニスカス塗布方法を用いてフィルム型の太陽電池を作製している。また、左下のカネカは建材一体型の取組。また、京大発ベンチャーのエネコートはI o T機器など、建物用への展開も含めた太陽電池を開発されている。その他、アイシンは、スプレー工法の技術の研究開発を進められているところでございます。

ペロブスカイトでございますが、こうした技術を様々な日本企業が今まさに研究しているわけでございますが、特徴としても①、②、③に書いていますとおり、①少ない製造工程で製造可能で、製造コストが大幅に下げられるのではないかとの見通し。また、②柔軟性、軽量は先ほど申し上げたとおりです。③主要な材料であるヨウ素の生産量は、日本が世界シェアの3割、1位がチリでございますけれども、世界第2位を占めているという状況で、こうしたシリコン系の太陽光電池以外での実用化可能な技術として、原材料のサプライチェーンの観点からも非常に有望なものだと考えているところでございます。

一方で5ページ目でございます。当然これは日本だけの取組ではございません。世界各国での研究開発の競争にしのぎを削っている状況でございます。

例えば、中国のDaZhengという企業がありますけれども、この7月にも100メガワット級の生産ライン構築に向けた調印式を開催したということでございます。また、左下のG C Lにおきましても、非常に大規模な投資を行っておられて、量産に向けた体制構築を進めている状況でございます。

また、欧州におきましても、英国・オックスフォードP Vはペロブスカイト・シリコンのタンデム型を中心とした取組をされており、2025年前後の大量生産を目指すといったところ。また、右下、ポーランドのサウレは、資料に示す取組を実施しているところでございまして、様々なマーケットを目指して、それぞれの研究開発が進んでいる状況でございます。

特にこうした中で、中国のベンチャー企業のみならず、世界中での研究開発、生産投資等の取組が行われており、非常に厳しい競争環境にあると認識しているところでございます。

6 ページ目、次世代型太陽電池開発ということで、まさにグリーンイノベーション基金で取組をさせていただいているところでございます。大きく3つのステップでございます。①ラボレベルでの研究開発というところで、高い性能。特に「変換効率」のみならず、実際の実用等を考えました「耐久性」が非常に重要でございます。

また、②大型化で、大量生産を考えますと、小さなモジュールではなく、大型化した上で量産していくことが重要でございます。それを両立する製造技術の開発に取り組んでいるところでございます。

また、③社会実装を目指した上で、ユーザーと連携した実証ということで、実際に様々なオケージョンでの取組をやっていく必要がある。これをある意味、ステップ・バイ・ステップで実施し、サイクルを非常に短期間で回していくということを併せてやっていく必要があり、一気通貫で取組させていただいているところでございます。

7 ページ目、8 ページ目は既存の取組でございます。先ほど一部御説明させていただきましたが、7 ページ目は実施体制で、各企業の取組、採択企業を出させていただいております。ここではまさに基盤技術の開発を各企業中心にやっていただいております。

また、8 ページ目でございますが、第1ステップのところに関連いたしますけれども、共通要素につきましては、研究開発の基盤である開発を行うということで、産総研さん中心の事業を実施している。事業イメージが下にご覧いただけますけれども、結晶構造などの技術開発、材料組成の開発、分析・評価技術開発などに取り組んでいる状況でございます。

進捗について9 ページ目ですけれども、ペロブスカイト太陽電池の研究開発状況というところで、先ほど申し述べたとおり、ヨーロッパ、中国を中心に技術開発競争が激化してございます。ペロブスカイト太陽電池は日本発の技術ということもありますけれども、特に耐久性などを含めまして、日本は世界最高水準に位置していると認識しておりますが、この研究開発競争激化の中で、いかに早く大型化、耐久性を踏まえた大量生産、製品化できるかが非常に求められている状況だと考えてございます。

一方で、大型化、耐久性というところでは、まだ半歩、一步リードしているところもあるのかなというところで、積水化学の場合には、現在30センチメートル幅のペロブスカイト、ロールtoロールでの連続生産が可能、耐久性も10年相当、また発電効率15%の製造に成功しているということで、今後、1メートル幅での量産化技術を確立させて、2025年の事業化を目指しているといった取組もございます。

10ページ目でございます。政府といたしましても、こうした量産技術の確立ということで、G I 基金の中での取組をさらに加速化していくことが1つの大きな柱でございます。

あわせて、生産体制整備というところで、2030年までの早期にいわゆる大量生産、コストメリットが考えられますギガワット級の量産体制構築を目指していくということで、今回の概算要求におきましても取組を強化していきたいと考えているところでございます。

また、あわせて、生産と同時に需要の創出というところで、早期に公共分野におけます導入を促していくような目標の検討でございますとか、あわせて海外市場の開拓も検討していく必要があると考えてございます。右下の3つ目に書いてございますとおり、特に欧州等とも連携しながら、耐久性ですとか、また、現在、太陽光パネルでも課題になっております廃棄・リサイクルの問題も、ペロブスカイトにつきましては、ある意味、廃棄・リサイクルを一体的に考えていくことで、しっかりとしたサーキュラーエコノミーの中で位置づけていくことも重要なのかなと思っております。

こうした中での国際標準や制度を併せて構築していく中で、ペロブスカイト太陽電池の国際的なマーケットづくりにも一体的に取り組んでいきたいと考えてございます。

11ページ目です。再エネ・水素等関係閣僚会議において、当然、経産省だけの取組ではございません。環境省、国交省をはじめとして関係する省庁が一体的な取り組みとのことで、特に11ページ目の最後のパラグラフですけれども、需要創出については、特に公共施設、学校施設なども含めて、また空港の駐車場、鉄道の法面などの公共インフラといった様々な分野への導入についても、政府の関係閣僚会議でアクションプランを作成しているところでございます。

資料12ページ目でございます。骨太の方針におきましても再生可能エネルギー導入に向けたイノベーション加速が技術自給率の向上につながるというところで、ペロブスカイト太陽電池を具体的に盛り込んでいるということ。また、右側の総理の国会会期末の記者会見におきましても、公共インフラ、建築物の壁面などに貼り付けられるペロブスカイト太陽電池などについての投資、技術開発の後押し、そして欧米等との普及や標準づくりについての御発言をいただいているところでございます。

先ほど申し上げました13ページ目ですが、GX関連の概算要求におきまして、真ん中に赤枠でくくってございますけれども、生産拠点の中でも重要な国内サプライチェーン構築支援というところで、ペロブスカイト太陽電池なども含めまして、5年で1.2兆円規模の投資を促していくような支援策も検討するというところで、今回、概算要求に盛り込んでい

くところでございます。

本日、御議論いただくところにつながってまいります。14ページ目でございます。まさに今回、G I 基金におきまして各国との研究開発の競争、もしくは、いかに大量生産に向けた取組を進めていくのかといった中で、G I 基金において追加、加速化を御議論をさせていただいているところでございます。特にそれぞれのステップごとに加速化、充実化させていきたいと考えているところでございます。

14ページ目の左下でございます。まず、①研究開発の基盤でございますけれども、現時点で最適な材料を探索、分析評価技術を開発しているところでございますが、先ほど申し上げたとおり、30センチ幅だったものが1メートル幅など、大型モジュールが大量生産に不可欠でございます。こうした大型モジュールに対応した組成分布などの基盤技術の拡充等を行いながら取組をしていく、また、そういう中での取組もフェーズ3の最終年度を念頭に、これは資料4にも書いてございますが、毎年しっかり検証していくわけでございますけれども、最大5年間の延長を見ていってはどうかと考えているところでございます。

②でございます。これまで研究開発というと、実用化して、その上で実証というステップ・バイ・ステップでやって、どうしてもリードタイムがかかってきたところが反省としてあるのではないかということで、そのリードタイムをいかに縮めて、現場のマーケットインの発想も含めて、研究開発の要素を実態のものと併せて、それをなるべく早く研究開発に取り組んで行き、さらにサイクルを短くしていく観点から、この赤文字で書いておりますが、いわゆる製造技術の確立と併せましてテスト的に実証を行って、その結果を性能向上等にフィードバックするといった、テスト実証と言ってございますが、それをやることによりまして、発電コスト全体の向上にも取り組んでいくといったフェーズを新たに設けて、これによって、より実地でも通用する製造技術の確立を行っていきたい。こうしたテスト実証をしっかり行っていくということが今回、追加、加速化するところの非常に大きなポイントだと考えてございます。

あわせまして、そうした研究開発を踏まえた製造技術の確立を踏まえながら、製造プロセスの個別の要素技術の改善といったことに取り組んでいく必要もございまして、右側でございますけれども、様々なシチュエーションでフィールド実証を行うことで、まさに社会実証を見据えた取組。これは特に需要家を巻き込み、また様々な施工会社も含めて、そうしたコンソーシアムなどを含めた形で取組に巻き込んでいくことは非常に重要だと考えてございます。そうした様々なシチュエーションにおけるフィールド実証ということで、

より早期の社会実証を目指していくといった3段ロケットをなるべく短いサイクルで回していくことによって、2030年を待たずにギガワット級の生産体制、そしてそれを社会実装できるような取組を需要家も含めて取り組んでいけないかと考えているところでございます。

15ページ目はそれぞれの金額面を含めたことを少し詳細に書かせていただいております。先ほど申し述べましたフェーズ1でございますけれども、既に80億円いただいてやっているところでございますが、プラス30億円で特に大型化などを含め基金などを活用していくことに加えまして、国際的な性能評価などについての取組などもやっていくということを含めて増額をお願いさせていただいているところでございます。

また、②フェーズ2でございますけれども、テスト実証を様々やっていく中で性能向上にもフィードバックするというので、こうした実体的な取組の中で製造技術の確立を行っていくというサイクルを非常にスピーディーにやっていくこと。それは当然、発電コスト20円/kWhの目標の早期達成は変わらずでございますが、そこをより実現、実行たらしめるための目的の中でやっていければと考えてございます。

また、③フェーズ3でございますけれども、今後、公募も実際行っていくことになってまいります。先ほど申し上げました拡充①、②につきましては、御議論もしくはパブコメを踏まえてお許しいただければ、契約変更等で取組を加速していくということ。また、③につきましては、新規の公募となってまいります。様々なプレーヤーの方々、需要家の方々を巻き込んだコンソーシアムも出てくると思いますので、こうしたものをしっかりと社会実装に向けて取り込んでいくことが重要でございます。こうした需要家を巻き込んだ取組の中で、様々なシチュエーションで耐え得るような実フィールドの取組を強化していくということを考えているところでございます。

今申し上げたところを詳細に文字にしたものが資料4でございますので、資料4につきましては、質疑等がありましたら少し御紹介させていただければと思いますけれども、私ども担当課室からの説明は以上でございます。ありがとうございました。

○高村座長　　どうもありがとうございました。それでは、ここから討議に入ってまいります。この間、委員名簿順にお1人ずつ御意見、御質問などをいただいておりますけれども、今回もそのような形でお願いしたいと思っております。一巡御発言をいただいた後で、委員の皆様からいただいた意見を踏まえて、さらに御発言があればいただくというセカンドラウンドを回す形でやっていきたいと思っております。大変恐縮でございますけれども、時

間の関係から、委員お1人3分程度で御発言をまとめていただけますとありがたく思います。

それでは、早速ですけれども、植田委員から御発言をお願いできますでしょうか。

○植田委員 承知いたしました。御説明ありがとうございます。

太陽光発電については、大規模な発電事業用がFIT制度の後押しを受けて一巡した中、2030年までのさらなる高み、117ギガワット超といった導入目標に向けては、今回御説明があったとおり、次世代太陽電池としての薄膜、軽量、フレキシブルといったペロブスカイト型太陽電池の技術開発をどんどん前倒しで進めていくことは極めて重要かと思えます。そういった意味で今回の御提案、加速、前倒しを含めて、さらに推進していくという提案内容については賛成しております。

その上で2点、少し御意見をお聞かせいただきたい点がございまして。1点目は、やはり最終的なカーボンニュートラルを達成しようと考えますと、今後2032年以降に想定されるようなFIT制度によって導入が進んだ発電事業用の設備、こういったものの設備更新やアップグレードも迎えてくるのではないかと考えております。そうしますと、世界的にはこういった地上設置の発電事業用が主流でありますので、ここに向けた次世代太陽電池の技術開発をやっていくべきではないか。これはエネルギーセキュリティといった観点でも極めて重要な点と思えます。

そうやって考えますと、現在、結晶シリコンが主流なわけですが、今後、1テラワット毎年入れていこうという議論も世界では聞こえてくる中で、そういった太陽光発電のコスト低減は高効率化、長寿命化が非常に重要になってくると思えます。先ほど動向の御紹介にもあったとおり、高効率化のトレンドが、ここに来てペロブスカイトとシリコンのタンデムというものが非常に高い注目を受けている状況だと理解しております。

したがって、質問としては、特に今回、フェーズ3で新たに公募をかけていく中で、非常に注目度の高いGI基金においても、次世代太陽電池の発電事業用といった観点でペロブスカイトをコア技術としつつ、結晶シリコンとのタンデム化といった製造プロセスやフィールド実証もフェーズ3の公募の中で支援していくお考えがあるかどうか。ぜひこういったものは含めていくべきではないかというのが1点目です。

2点目はシンプルに、これも御説明にあったとおり、サーキュラーエコノミーでペロブスカイトを普及段階に進める中では、やはり鉛を含んでいるという問題は避けて通れないと感じております。その意味で今回、フェーズ1で基盤技術についても拡充する中で、こ

ういった環境影響評価とか代替材料の可能性、またはそういった回収、リサイクルに向けた社会システム構築といったものに向けた基盤技術も今後のフェーズ1といえますか、基盤技術開発の中で取り扱っていくお考えはあるかどうか。この2点について回答いただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○高村座長 ありがとうございます。今、植田委員から御質問がございましたので、事務局からお答えいただくことはできますでしょうか。

○能村新エネルギー課長 事務局でございます。2点御指摘いただいていると理解してございます。

まず1つ目が、まさに高効率というところで、タンデム型の可能性でございます。世界を見渡すと、確かにオックスフォードPVをはじめとしてタンデム型も非常に研究開発が進んでいるところでございます。我々としても当然、タンデム型についてもしっかりとそのスコープの中でいろいろと対応していく必要があると考えています。

現時点でタンデム型につきましては、G I 基金プロジェクト以外でも対応しているところでございまして、具体的にはNEDOの研究開発の中での支援を併せて実施しているところでございます。したがって、G I 基金の中にはないのですが、政府としては全体として取組をしているところでございます。

先生御指摘のフェーズ3のG I 基金の可能性というところも当然、視野に入れながら検討していければと思っております。まずNEDOでのタンデムの取組も我々は別途、しっかりと進捗を把握しながらやっておりますので、その中でフェーズ3の可能性が出てくれば、それはまた改めてこちらの御議論になると理解してございますけれども、ぜひこうした議論についてもチャレンジさせていただければと思っております。しっかり様々な日本技術の可能性、また、タンデムも当然、世界での競争の中でやっておりますので、こうした日本の取組をしっかりと後押しできるようなことについては、あらゆる政策手段を組み合わせながら取り組んでいきたいと思っております。

もちろん今回、フィルム型ですとか、いわゆる重いガラスを使えないところでの設置、ある意味、マーケットが用途によって様々違うと思っておりますので、まさに先生おっしゃったように、野立ての入替えや、より高効率の発電が必要というところにおいてはタンデムも視野に入ってくるのかなというところでございます。そこについては、我々としてもマーケットと併せてどういう実フィールドがいいのかということについて、様々検討してまいりたいと考えてございます。

一方で、御質問の中にはなかったのですが、サーキュラーとの関係で言うと、さらに一歩、研究開発的な要素としては、いわゆる既存のポリシリコン型の太陽光発電に例えば寿命が来て、それをリサイクルしていく中でペロブスカイトに組み合わせるようなこともできるかできないかと。今、そこは少しコストが高いのではないかとこのところ、どうしても新規のポリシリコン型太陽光発電プラスペロブスカイトのタンデム型が基本的には主流になってくるわけですが、まさに先生御指摘のサーキュラーということを考えますと、大量に出てくるポリシリコン型太陽光電池の中でも、まだ性能として使えるものをいかに高効率にしていくのかといった観点も重要なかなと思ってございます。そういうことも含めて、G I 基金ではないにしても、様々な可能性について、制度面も含めて、今、環境省と連携して議論していますけれども、こうした取組もスコープの中に入れて検討していきたいと考えております。

また、後半のサーキュラーとの関係で御指摘いただきました鉛の話でございます。これについては、まさにしっかりと回収していくモデル、これが鉛に対する対応も含めて重要なかなと思ってございますし、また、恐らくポリシリコン型太陽光は重いガラスでございませうけれども、一方でフィルム型を中心としたペロブスカイト太陽電池であれば、回収もしくは取替えも簡便にできるといったことなどもございます。そういう面では、サーキュラーエコノミーの中でも非常に重要な太陽光、再生可能エネルギーの1つの設備になっていくのではないかと考えてございます。

ある意味、鉛が弱点でございますので、しっかりルールをつくって、社会にとっても不安のない形で御使用いただけるようなビジネスモデルなりルールをつくっていくことと併せて、先生御指摘のような、いわゆる鉛以外の代替でございませうけれども、例えばずを大体材料として取組をしているG I 基金の取組もございませう。より鉛フリー、もしくは鉛レスなものにしていくということを同時にやっていく必要がありますので、この研究開発によって、なるべくそうした鉛を使わなくていい取組と、鉛があってもしっかりと社会の観点から受け入れられるようなルールづくりをしていくことを併せて同時的にやっていこうと考えてございますので、先生御指摘のいずれのところも事務局としてしっかり承りながら取組を進めてまいりたいと考えてございます。

事務局からは以上でございます。

○植田委員 御回答ありがとうございます。私としてはよく分かりました。

○高村座長 ありがとうございます。それでは、続きまして、志村委員、御発言をお願い

いできますでしょうか。

○志村委員　ありがとうございます。御説明ありがとうございます。今回の追加、加速というのは、海外動向を把握された結果、前倒しが必要だという御判断の下、御提案いただいていると認識しておりまして、私も全く同様の理解でございます。かつ今回、必要な措置をタイムリーに御判断いただけたのではないかと考えておりますので、賛成でございます。

その中で3点ほどコメントさせていただければと思います。まず、研究開発内容1つ目の基盤技術開発ですが、製品評価試験等において日本の技術が正当に評価されることはとても重要と認識しております。特に国際競争力を確保していくところでも重要と考えておりますので、そういった観点からも今回、拡充いただくところは有意義かと思ひますし、今後の国際標準化に向けた議論で戦っていくためにも、ぜひ頑張ってくださいと考えております。

研究開発内容の2なのですが、特に量産技術の確立に向けてテスト的に実証を行うというところは、私ども金融機関としては高く評価させていただいております。これはもしかしたら今回の拡充の議論とは異なる点かもしれませんが、実際に企業が生産ラインを新設するために投資判断を行うには、ある程度の需要の見通しが立たないと難しく、またこれは私ども金融機関が確認する内容の1つでもございます。

その点において、先ほどの経済産業省の御説明で、現在、政府のほうでも需要側の創出について御検討いただいているお話だったのですが、国内で実績をつくるのがひいては海外への進出を後押しいたしますので、ぜひこの点においてもできるだけ速やかに議論を進めていただければというところを付言させていただきたいと存じます。

最後に、研究開発内容③の実装ですが、これは本当に最終的に海外での競争に優位に立つ上では、コスト以外にも導入実績が重要になってきまして、これを日本国内で早期に実施いただくことが肝要だと思います。

特にペロブスカイトのような新技術を用いるプロジェクトの投融資は、耐久性も含めて様々な問題がある中で、最終的には実績と、それに見合った補償が求められてくるのではないかと考えます。そういった中で、いろいろな工夫をされるかと思ひますが、実際に海外のマーケットで特に求められているようなタイプの建造物において実証を進めていただくとか、実際に実証を行うにしても、短期ではなくて長期間のデータを取っていただき、できるだけ耐久性を証明しフィードバックをいただくことによって迅速に進めていただく、

そういったやり方もあるかと思しますので、実際に③を進めるところでは、少し工夫いただければと思います。よろしく願いいたします。

○高村座長　　どうもありがとうございます。プロジェクトを進めていく際、大変重要な御発言をいただいたと思います。時間の関係がございますので、委員の皆様にご質問を含めて一巡全て御発言をいただいてから、その後で事務局に、場合によってはNEDOにお答えいただこうと思います。それでは、続きまして、鈴木委員、お願いできますでしょうか。

○鈴木委員　　鈴木です。もう既に出てきていることに重なってしまいますので、簡単なコメントということでお話ししたいと思います。

競争力強化に向けて、基盤技術でさらなる性能の向上を図って、実用化事業で大型化、量産化の技術を確立すると。その上で早期の実証事業を行うという3本の柱、いずれも内容は結構かなと思っています。追加的措置で後押しして、ぜひ進めていただけたらと思います。

特に実用化に向けてスピードアップは非常に重要で、ちょっと出遅れるといろいろな支障が発生しますので、スピードアップのところはぜひ頑張ってもらっていただけたらと考えます。

私からは以上です。

○高村座長　　鈴木委員、どうもありがとうございました。それでは、続きまして、関根委員、お願いできますでしょうか。

○関根委員　　ありがとうございます。2点ございます。

まず全体として、日本で生まれ育ったペロブスカイト太陽電池をロールtoロールでつくっていく技術というのは、私としては非常に重要だと考えております。こういった重要なものを政府が後押ししてどんどん進めていく、これは大いにやっていただければと思っています。

その上で2点、念頭に置いて進めてほしいと思っています。1つは、このビジネスが仕上がったとき、誰が出口で待っているかということです。誰が使ってくれるのか。これを常に考えた制度設計並びにビジネスを行っていく必要があるやに思います。御存じのように、ともすると日本の製造業は技術オリエンテッドでいいものをつくるのは得意なのですけれども、ビジネスで負けるケースが多々ございます。例えば、過去の太陽電池、二次電池、液晶、半導体、枚挙にいとまがないかと思えます。こういう轍を踏まないよう、ぜ

ひ勝てるビジネスになるような全体的な仕掛けを考えてほしいということです。

2つ目は、海外競合の動向です。例えば、二次電池やEVなどは発展途上ですね、などと言っているうちに、あっという間にCATLやBYDが世界を制して、とてつもないマーケットをつくっています。また、情報通信の世界ではStarlinkのようなものが、ちょっと目を離した隙に世界中をしっかりとカバーしているような、言ってみれば、気づいたら手遅れという状況が既にいろいろな分野で出てきております。

この分野も研究者の母数の数では、例えばお隣の中国と日本では恐らく数十倍、数百倍という数の研究者があちらにはおられて、物量では圧倒的に負けているというか、勝ててこないような状況の中で、日本発の技術をどうやって育てて、どうやってビジネスにつなげ、それをしっかりと世界のマーケットに入れていくかということを考えていただければと思います。

以上です。

○高村座長 ありがとうございます。それでは、竹内委員、お願いできますでしょうか。

○竹内委員 ありがとうございます。御説明いただきまして、ありがとうございます。先ほど志村委員もおっしゃったように、私も追加という部分は、これまでやってきた部分を生かすところでもありますので、基本的に賛成させていただきます。それ以外で重複のないところで簡単にコメントを申し上げたいと思います。

ペロブスカイト、次世代型太陽光発電の技術に対する国の支援はなぜやっているかというところから考えたいと思うのですけれども、日本の太陽光発電の導入を進めるためには、国土の狭さであるとか山がちであるといった制約から、我が国がこの技術を必要とするのは確かだと思いますけれども、ここまで国費を投じている意義は、産業として育成することで我が国の経済成長につなげる、要はチャンスを生かすということだろうとっております。そうしますと、要は国際マーケットで売れる必要があるということだと認識しております。

ただ、基本的に土地制約等によって、この技術を必要とする国がどれぐらいあるかというところは、やはり冷静に見なければいけないと思います。既存の太陽光の技術に取って代わるということであれば、それと同等のコスト競争力、もちろんこのコスト競争力は施工から廃棄まで含めたトータルのコストですので、次世代技術の優位性が生きる部分もあると思いますけれども、いずれにしてもこのコスト競争力を同等ぐらいまでにする必要があると思います。

タンデム型等への注目も集まりつつあることは承知しているのですが、コスト競争力で既存技術と肩を並べるといったところで、こうした市場の開拓を目指していくのか、あるいは次世代型技術でなければできないようなマーケットを開拓する、例えばなのですが、自動車の上に設置して、モビリティとユーティリティの融合を進めるキーにしていくことを目指すのかといったようなところ。これは、もし後者であるとするならば、それはそれで別の支援策を考える必要があるのかなというところ。ここら辺をどうお考えかというところはお伺い申し上げたいと思います。

産業育成という観点に立ちますと、当初勝つだけではなくて、やはり勝ち続けてもらわなければいけない。既存太陽光についても、当初は政府のバックアップもあって、日本企業がリードするわけですが、あつという間に中国、台湾の企業等に抜かれる。その段階になると、相当の普及段階になってきていると思いますので、国の支援といったところよりは、特に産業の努力になってくるのかもしれませんが、やはり政府の果たす役割は小さくないのだらうと思います。これまでの経験の分析をぜひ官民で活かして、勝ち続けていただきたいということ。これはお願いベースになります。

最後に、ちょっと嫌なことを申し上げるのですが、国際マーケットでの勝負を考えたときに、我々としても勝てるプレーヤーに特化して支援していくことが必要になってこようかと思います。経産省さんとしては、コスト目標をセットして、これに到達しなければ支援打切りもあり得るということは当初からおっしゃっていただいているわけですが、それを待たずしても、だんだん勝敗が見えてくることもあろうかと思います。その際にどうするかという部分。ちょっとここはお伺いしておきたいと思うところがございます。この点は御質問でございます。

私からは以上でございます。

○高村座長　　ありがとうございました。それでは、藤田委員、お願いできますでしょうか。

○藤田委員　　御説明ありがとうございました。

グリーンイノベーション基金の中でも国産ペロブスカイトは非常に重要なところで、国際的にも負けられない分野かなと認識しています。海外が非常に多額の開発費でどんどん進んでいるところで、国内でこれまでに採択した大手企業、もしくはスタートアップに対しての追加開発支援は非常にいい判断ではないかということで、賛成させていただきたいと思っています。

一方で、金額がプラス150億円ということなのですから、果たしてこの150億で足りるかどうかというのが今後、毎年毎年のマイルストーンを見ながらの検証が非常に重要かと思っております。追加でさらに必要になっていくような場面が出てくるようであれば、柔軟な対応が必要かなと思っております。

最後に、3つ目のところで、空港ですとか高速道路といったところで実証の場所を広げていくということでした。ビルですと東京都内は非常に高いビルもありますけれども、設置も結構大変そうだと思いますが、地方の大型の展示場ですとか、もしくはJリーグ、Bリーグ、いろいろ基準が変わって、大型のスタジアムが長崎、広島ほか各地に出てきますけれども、こういったスタジアムもしくは自治体などとの連携もしながら、場所をどんどん広げて実証していければと思っております。

以上です。

○高村座長　　ありがとうございました。それでは、松井委員、お願いできますでしょうか。

○松井委員　　松井でございます。ありがとうございます。皆さんにおっしゃっていただいたので、簡単にコメントだけさせていただければと思います。

まず、当初の段階から耐久性と長寿命化が実用性を高めていく上で大きなポイントだというのは申し上げてきておりましたので、今回の全体的な方向については賛成をさせていただきたいと思っております。国際競争の話も皆さんされていましたが、そういったところも含めて、早期に事業化を進めていただければと思っております。

1点、植田先生もおっしゃっていた環境影響評価の絡みなのですから、ファイナンス、外部の投資家を集めていく上では、そういった環境影響評価ですとか技術評価が重要であると。第三者が見て、ちゃんとお墨つきを与えるところが非常に重要だという話は冒頭から申し上げてきたところでございますので、今回、期間と金額をフェーズ1で追加されておりますけれども、こちらも念頭に置いて、事業化のスピードに負けないように、こちらの標準化、制度評価の方法の確立も進めていただければと思っております。

私からは以上でございます。

○高村座長　　ありがとうございます。それでは、最後になりますけれども、松本委員、お願いできますでしょうか。

○松本委員　　ありがとうございます。御説明いただきまして、大変ありがとうございました。

各国における開発競争が非常に激しさを増しております。本プロジェクトの開発が後れを取るのではないかと懸念していたところですので、今回、追加的な取組を行うことに賛成したいと思います。

現在、諸外国におけるペロブスカイト開発の動向について5ページにお示しいただいているように、中国、イギリス、ポーランド、スイスやアメリカなどで研究開発が進められております。私が調べた中でもフランスとイタリアの研究チームによるPSC、Siタンデム太陽電池の開発、またシンガポール、サウジアラビア科学技術大学でもSiタンデム太陽電池の開発が進められていますので、各国における研究開発が積極的に進められている状況と思います。

また、先ほど関根委員からもお話がありましたが、日本に比べて10倍以上の研究者を擁していると言われている中国においては、今年度、2023年度の国家重点研究開発計画における研究プロジェクトとしてペロブスカイト、Siタンデム太陽電池、ペロブスカイト薄膜太陽電池の重要技術と製造装置などを挙げております。

このように積極的に各国が取り組む中で、14ページ、15ページにありましたように、実証フェーズにおける拡充ということで、追加的な措置を行うことにも賛成と思いますが、当初からこのプロジェクトに関わっている企業をコンソーシアムの的に連携させて公募することはできるのでしょうか。

それから、サプライチェーンへの配慮も不可欠だと思います。開発競争が非常に激しさを増す中、サプライチェーンの配慮を行うことで日本企業が有利になる可能性があるかと思えます。実際に投資家が商品を購入したり、企業を投資したりする上で、人権侵害や環境破壊に加担しているものは避けたいという流れがありますので、企業においては責任あるサプライチェーンマネジメントが求められると思います。この点もぜひ、本プロジェクトに関わっている企業にもしっかり頭に置いていただきたいと思います。

以上です。ありがとうございました。

○高村座長　　ありがとうございます。今、一巡、先生方から御発言をいただきました。植田委員からの御質問については既に能村課長からお答えいただいておりますけれども、続く委員の御発言、一部質問もあったかと思えます。事務局あるいは担当課から御回答、もしよろしければお願いしたいと思います。

○能村新エネルギー課長　　担当課でございます。新エネルギー課長の能村でございます。

各委員から、特に実証を含めた対応についてスピーディーにやっていくこと、また早期

にやっていくことにつきまして、特に各国との競争の中で国際マーケットを見据えたシチュエーションで様々な御示唆をいただきました。ありがとうございます。

志村委員からも、特に国際マーケットを見据えて、海外に求められるようなタイプも含めて実証などをやっていくことなどについて御示唆いただきました。我々もそこからのデータをフィードバックし、将来を見据えたバリエーションの中で、フェーズ3も含めて完結できればと思っております。また、設計を詳細に考えていく上で参考にさせていただきたいと思っております。

また、鈴木委員からも、特に実用化のスピードに出遅れないようにということでございまして、今年スピードアップしていくという観点からは、テスト実証を早期にやっていきますし、実証の第3フェーズのところも、今年度中になるべく早く取り組んでいきたいと思っております。先ほど中国の動きを御紹介などもさせていただきましたが、各国しのぎを削って、テスト実証的なことと取組を強化していますので、まさに日本においても先駆けでそういった取組ができるように、しっかりと取り組んでいきたいと思っております。

また、関根委員から、出口志向ということで、まさに我々はF I T制度も運用している課室でございますけれども、その中で2010年代初頭におけます日本の太陽光パネルの事実上の撤退を見てきた立場でございますので、その反省を踏まえた上で、まさに今回、一気呵成の政策も取り組んでいるところでございます。

先生におっしゃっていただいたような出口志向、マーケットインという志向も当然考えてございますし、また後半おっしゃっていただいたような海外動向を見ながら、手遅れにならないようにと。これは鈴木委員からも同じような御指摘をいただいたところでございますけれども、そういう中でしっかり取組をやっていければと思います。

研究者の数では確かに負けているところがありますけれども、実際には製造に至る様々な関連する産業の分厚さですとか、またシステムとしてやっていく上で関係する企業の連携については、日本はまだまだ強みがあると思っております。それをラストチャンスと捉えて、しっかりと取組を進めていきたいと思っております。

その中で、竹内先生からありました、いわゆる国費を投入していく上では、産業投資という観点で当然、国際マーケットを見据えているのだろうということで、まさにそのとおりでございます。加えて申し上げれば、やはり国内におけます投資の流れ、国内におけるサプライチェーンを含めた投資支援、もしくは投資の喚起をやっていく中で、さらに国際

マーケットを狙っていくと考えてございます。

その上で重要なのが、まず必要十分条件ではないのですが、先生がおっしゃったようなコストのところでは、いわゆる今のポリシリコン型に対抗していくような競争力がまず必要条件だと思ってございます。ここの価格差、最初はあると思いますが、そこをなるべく早期にシリコン型のもと同等に持つていくのだというところ。

また、製造という断面だけで見れば、ロールtoロールを含めて、製造コストだけ見れば、より安くできる、またトータルの仕上がりを見て、それがトータルの面でもしっかりシリコン型と競争していけるような水準が必要条件だと思ってございます。

あわせて、十分条件というか、先ほど関根先生におっしゃっていただいたように、マーケットはどこを狙っていくのかは極めて重要だと思ってございます。これについては今、G I 基金で採択した企業によっても当然、マーケットは異なっておりますので、このマーケット、需要家の掘り起こし、出口というところと、実際そのマーケットが拡大する規模の見込みも含めて、ある意味、そういった出口を見据えながら、それぞれのプレーヤーの方々の取組をいかに後押ししていくのかということについては、選択的、戦略的に狙っていく必要があるのではないかと考えてございます。先生おっしゃったことは、A or Bではなくて、必要十分的にしっかりと両方考えていく必要があるのかなと考えてございます。

その中で、みんなその世界に到達できるとは必ずしも思っておりませんので、厳しいコスト競争ですとかマーケットの拡大見込みなど、一方でしっかりと客観的に、冷静に分析していく中で、ある意味、支援の特化というか重点化も当然、必要的に発生すると思っております。2つ目に質問いただいたとおり、どうしていくのかと言われれば、まさにそうした中で選択的、もしくは重点化していく局面は近く来るのではないかと考えてございます。そういう中でどういうものを戦略的に重点化、特化していくのかということをご政府内でもしっかりと議論し、またこの委員会におきましてもお諮りさせていただければ思っているところでございます。

藤田委員からは、150億で足りるのかといった、我々担当課としてみればエールをいただいた御指摘もいただいております。まずは今回の増額分について、世界の競争に負けないようにということで、しっかり最大限活用させていただくことが前提ではございますけれども、より必要な局面があれば、柔軟な対応は当然、担当課室としては考えていきたいと思っておりますし、先生がおっしゃったように、自治体ですとか様々な地方の需要

も含めたバリエーションの用途については、我々としてもフェーズ2、3含めて考えていきたいと思っています。

松井委員からも第三者的な視点から環境影響、技術的な評価を含めてしっかりと客観的なお墨つきが必要だということでした。第1フェーズのところも毎年度、必要性についてはしっかり検討してまいりますけれども、こうしたビジネスの展開に合わせて、第1フェーズでやっていきます基盤的な話、標準化みたいなところも両輪でやっていく必要があると思っています。特に国際的な標準については、すぐに取組に動いていくということ。また、仲間づくりということで国際的な連携も政策当局を含めて連携を深めてしっかりと進めていきたいと考えてございます。

最後に松本委員から、世界を見据えた非常に多角的な御指摘をいただいております。ありがとうございます。また、中国やポーランド、イギリス以外にも先生おっしゃったようなフランスですとかイタリアなどの取組、またシンガポールの御指摘もいただきました。そういう中で、まさに世界の中で非常に関心の高い技術でございますし、様々な研究者、機関がしのぎを削って取組をしているところでございますので、コストをいかに安くしながら、かつ戦略的にどのマーケットを考えていくのかという極めて重要な局面をこれから迎えてくるということでございます。

様々な実証フェーズの取組を加速していくことが今回の議論テーマでございますが、先生の御質問にもありましたとおり、既存のプレーヤーが様々な需要家等を含めたコンソーシアム、これは当然重要だと思っていますので、フェーズ3ではこうした取組もしっかりと採択できるような設計を詳細に考えていきたいと思っています。

また、先生がおっしゃったように、ペロブスカイトにつきましては、いわゆるポリシリコンフリーといったサプライチェーンが構築できることもございますので、サプライチェーンマネジメントの観点からも、より完結できるような再生可能エネルギーの設備ではないかと思っています。サプライチェーンマネジメントの観点からも、もしくはサプライチェーンを特定国に依存しないといったリスクマネジメントの観点からも優位性のあるものだと思っていますので、日本の技術が実用化し、国際マーケットにもしっかりとアドレスできるような取組を政府、そしてG I 基金を使って各企業の皆さん方、産総研などの関係するプレーヤー、NEDOの方々と連携しながら、着実かつスピーディーに取り組んでまいりたいと思っています。

担当課からは以上でございます。

○高村座長　　ありがとうございます。事務局、あるいはNEDOから御回答、御発言ございますか。

○笠井室長　　事務局でございます。竹内先生からいただいた御指摘について事務局の観点で少しだけ御説明申し上げたいと思います。

特に勝てるプレーヤーに支援をどう集中していくのかという観点で御指摘いただきました。これは極めて難しい御指摘であると同時に大切な観点だと考えてございます。

制度全体として申し上げますと、1つは、ステージゲートというところでしっかり技術的な水準とか進捗を見極めまして、これに到達しないものについては中止していくという仕組みを入れ込んでおりますけれども、同時に技術面だけでなく、まさにビジネスの状況とか競争の動向をしっかりと踏まえながら、残念ながらこれは苦しいという場合には、撤退していくということも重要なのだろうと考えてございます。

そういう意味で、我々政府側だけで勝手に決めることは難しい面があるのですが、一方で、この基金事業全体としては、フェーズが上がっていくにつれて次第に補助率が下がるという仕組みを入れてあります。つまりは、企業側の負担が増えていく仕組みの中で、自社の競争力をしっかりと捉えながらこの事業を続けていくのがいいのかどうかということをお判断いただく。それを我々としても促していく。そのために必要なデータとか情報もちゃんと集約していく。こういう活動の中で、ある意味しっかりとした取組に集中的な投資ができるような運用をしていくことが重要ななと思ってございます。

この点、極めて難しい課題ではあるのですが、基金事業を立ち上げたときからそういう仕組みをしっかりとワークさせていかなければいけないという問題意識でやってきているところがございます。これは我々としても御指摘を踏まえて運営していけるように取り組んでまいりたいと考えてございます。どうもありがとうございます。

○高村座長　　ありがとうございます。NEDOさんから何かございますでしょうか。

○弓取オブザーバー　　NEDO、弓取でございます。本日はありがとうございました。

色々コメント頂いた中で、性能の向上は技術開発上もちろん重要なのですが、今日いろいろと御指摘いただいた中で、性能評価技術は誰のための評価技術なのか、誰に納得いただくための評価技術なのか、そのユーザーはどこにいらっしゃって、どんな点に着目されていらっしゃるのか、そういったことをよくよく考えながら、性能評価技術の開発を行っていきたいと考えております。

もちろん、その中には御指摘にあった環境影響に関する取り組み、例えば欧州に出して

いく場合、これが非常にクリティカルな 이슈 になっていきますので、こういった点についての取り組みも検討していきたいと考えております。

また、私どものマネジメントツールの中に公募プロセスであるとか委員会というものがございますので、そういったマネジメントツールを大いに活用しながら、注文もつけ、また勝てるプレーヤーをより強くしていくようなマネジメントを実施させていただきたいと思っております。その上で、私どもの他の事業で実施しておりますタンドム太陽電池についても、G I 基金とのシナジー効果を発揮できるよう、情報共有あるいは委員とのコメントの共有であるとか、そういったことも考えてまいりたいと考えます。全体として今、総じて順調にっております。

以上でございます。

○高村座長 ありがとうございます。予定の時刻を過ぎておりますけれども、今、事務局、担当課、そしてNEDOから御発言いただきました。委員の皆様から追加、あるいはフォローアップの発言、御質問ございましたら、Webexの手挙げ機能をお使いいただいておりますお知らせいただければと思いますが、いかがでしょうか。御発言を御希望の委員はいらっしゃいますでしょうか。――よろしいですか。ありがとうございます。

今、各委員から御発言をいただきました。委員の先生方から様々な事業の充実に向けての御意見、御示唆をいただいたと思っております。しかし、いずれにしてもこの分野の研究開発内容を充実させること、そして今回御提案いただいておりますけれども、新たな実証事業について公募を進めたらどうかという御提案について、その必要性、重要性については皆様一致し、賛成していただいているかと思っております。

幾つか大変重要な御指摘をいただいていると思っております、量産化、あるいはそれを通じたコスト低減の課題、国際的な競争にいかにより優位性を保ち勝っていくかという点についても様々な御示唆をいただきました。志村委員をはじめ、やはり国内市場、需要をつくっていくことの必要性、これはカーボンニュートラル、あるいはネットゼロに向けた関連政策ですとか、あるいは買取制度をはじめとした再生可能エネルギー政策との連結、連動が必要になってくるかと思っておりますし、担当課からも御説明がありました。

その観点から、関根委員がおっしゃいましたけれども、やはり出口を意識した新たな研究開発、今回の実証事業というのはそういう価値がある事業だと思います。担当課からも御説明がありましたけれども、やはり日本の分脈においては、とりわけ建築物一体型の太陽電池の導入、それを支える技術というものを、そういう意味では出口を意識して検討す

ることが必要だと思えますし、今日、委員の中からはインフラ一体型という御示唆がありました。そうした異業種の連携ができるコンソーシアムの形成を促して推進していくことの必要性は、おおむね委員の皆様方一致していたところかと思えます。

もし追加で御発言の御希望がございましたらお知らせいただきたいですけれども、よろしいでしょうか。

それでは、今回の研究開発・社会実装計画につきましては、本日、委員の皆様からいただきました御意見を踏まえて、プロジェクト担当課が事務局と調整をしていただいて、必要に応じて修正を加えて、最終的に決定していくプロセスになってまいります。もし御承認いただけるようでしたら、本日いただいた御意見の反映につきまして、事務局との調整につきましては私に御一任いただくことはできますでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

ありがとうございます。それでは、もし御異議の声がなければ、今申し上げましたように、研究開発・社会実装計画に反映させることにつきまして、私が事務局と調整してまいりたいと思います。どうもありがとうございます。

それでは、最後ですけれども、事務局から連絡事項についてお願いできればと思います。よろしく願いいたします。

○笠井室長　本日も御議論いただきまして、ありがとうございます。今後のスケジュールについてですが、次世代型太陽電池の開発プロジェクトにつきましては、先ほど座長からございましたとおり、委員からいただきました御意見、それから今現在実施しておりますパブリックコメントで提出された御意見、これらを踏まえまして、座長と調整の上で必要に応じて修正を加えて、最終的には経済産業省として決定し、公表することを予定してございます。この決定後、先ほど説明にありましたとおり、既存の実施企業との契約変更ということで、拡充していく部分についてはその手続を進めてまいります。また、新たに公募を行う部分につきましては、準備ができましたところで公募を開始していくことにしたいと考えてございます。

また、パブリックコメントは現在実施中でございますけれども、こちらに提出されました意見につきましては、この会議のホームページに公表させていただくことにしたいと考えてございます。

また、既に組成されているプロジェクトについてのモニタリングも引き続き進めていく予定にしております。また詳細は別途、事務局より御連絡させていただきますので、ど

うぞよろしくお願ひいたします。

以上になります。

○高村座長　　ありがとうございます。それでは、本日の産業構造審議会グリーンイノベーションプロジェクト部会グリーン電力の普及促進等分野ワーキンググループの第6回会合を以上で閉会としたいと思います。大変お忙しい中、委員の先生方にはお集まりをいただき、どうもありがとうございました。以上で閉会とさせていただきます。ありがとうございます。

——了——

(お問合せ先)

産業技術環境局 エネルギー・環境イノベーション戦略室

電 話 : 03-3501-1733

F A X : 03-3501-7697